



上/ 山上の担当現場。有明と中央防波堤地区をトンネルで繋ぐ。
下/ 納品された資材の管理は山上の担当業務のひとつ。

輝け! けんせつ小町

現場監督

山上晶子

株大林組 南北線陸上トンネルJV工事事務所



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。



土木の講義がきっかけで建設業界で働きたくなったと笑顔で語る今号の小町。震災の復興現場を経験し、その土地の人々のことを想いながら仕事を喜び、会社を超えて大勢の人と協力しながらものづくりをする魅力を知ったけんせつ小町を紹介する。

コンクリートをもっと「知りたい」

「大学時代に受けた土木の講義がものすごく面白くて。こういうことを活かせる仕事がないかと思ったんです！」

(株大林組)に入社して今年で四年目になる山上

晶子は、開口一番にこう話した。

「大学一年生のときは教養科目がメインで、二年生になると土木と建築の専門的な講義が始まります。三年生のときは専攻を決めるカリキュラムを受講しました。大学入学当初は建築を志望していましたが、一年生で始まった土木の講義に感銘を受け、その魅力に惹かれていったんです。あるとき『地下』がテーマのグループワークがありました。電線の地中化という具体的なテーマに沿って対象地の土質を調べたり、費用を計算したりしたんですけど、実現性を考えて計画をつくり込んでいくのが楽しくて。でも、なにより印象に残っているのはコンクリ

ート実験でしたね。コンクリートを練って、梁をつくって、耐荷実験をして。自分の立てた仮説を実証できたときには、すごくやりがいを感じました」

座学や実験を通して土木のものづくりへの興味が深まっていった矢先、東日本大震災が起った。

復興現場で「役に立ちたい」

「東日本大震災が起きたのは、私が三年生から四年生に上がる春休みでした。津波や地震で一変した東北の様子をテレビで見たときは、土木について学んでいるながら何もできないもどかしさで胸がいっぱいになりました」

東北の惨状を見た山上は、生活の基盤をつくっている土木の重要性を再認識するとともに、被災地で何か役に立ちたいという想いが込み上げてきた。

「すぐにも現地に行きたかったのですが、まだまだ知識不足で自分にできることは乏しいと感じました。いま私にできることは、いち早く専門性を身に付けることだと思いました」

山上は大学院に進学、土木工学の知識を深めていった。その後、就職活動の中で、数多くの復興事業に取り組んでいる(株大林組)に魅力を感じ、二〇一四年に入社。

「被災地がいまどうなっているのか自分の目で確かめたくて、就職活動中も入社してからも

my Beginning 私が建設業界に入った理由
「知りたい」が私を動かす

my style

ピアノを弾いたり音楽を聴くことが好きです。音楽の先生である祖母、フルート奏者である父の影響もあり、4歳から17歳までピアノを習っていました。大学受験をきっかけにピアノから一度離れていましたが、仕事にも慣れてきた入社2年目に自分の好きなことをやりたいと思い、ピアノを買ってレッスンに通い始めました。ピアノ教室にはお子さんがいる主婦やご高齢の方など様々な方がいて、仕事とも友達付き合いとも違う人間関係に刺激を受けています。



山上が愛用しているピアノ



右/前日に初めて打った均しコンクリートを確認する山上。「工程がぎりぎりでしたが皆さんと協力して予定通りに進めることができました。きれいに仕上げることができてとても嬉しいです」
左上/工事事務所の皆さん。山上の右隣が中瀬所長。
左下/掘削した土は船に積み込み、別の現場などへ運ばれる。



my Growing 私が建設業界で学んだこと

先を読み、現場を回す

自分自身が仕事を楽しむ
気仙沼の復興現場で感じた仕事の楽しみは二つあると山上は言う。一つは、日々変化する現場を間近で見られること。もう一つは、様々な土地で様々な人と交流ができることだ。

「現場管理を中心に、いまは掘削と切梁を担当しています。また、工程表や施工計画書づくりという新しいことにもチャレンジしています。上司に相談や質問をする際には、自分なりの答えを持って話をするように意識しています」
一日に事務所と現場を何度も往復し、体力的に疲れることもあると山上は言うが、その顔に迷いや不安はなかった。自分の手で一つひとつ作りあげていることへの自信が伺えた。

二〇一六年八月、工期通り造成工事が竣工。復興現場で多くのことを学んだ山上は現在、東京都江東区の東京港で陸上トンネル築造工事に従事している。

「段取りが悪かったり作業ミスがあると收拾がつかなくなってしまう。『協力会社のミスは全部自分のせいだと思え。ミスが起こる前に自分が気付けるよう現場を注意深く観察しなさい』と言われたんです。何が起こるか考え、細かいところまで自分の目で確認する癖がつかしました」

二〇一六年八月、工期通り造成工事が竣工。復興現場で多くのことを学んだ山上は現在、東京都江東区の東京港で陸上トンネル築造工事に従事している。

「段取りが悪かったり作業ミスがあると收拾がつかなくなってしまう。『協力会社のミスは全部自分のせいだと思え。ミスが起こる前に自分が気付けるよう現場を注意深く観察しなさい』と言われたんです。何が起こるか考え、細かいところまで自分の目で確認する癖がつかしました」
復興現場で働くことの重みを知った山上。担当を任された際に上司から言われた一言を胸に刻んでいる。

「地元の方は復興事業がどう進むのかをものすごく気にされていたので、現場にもよくいらっしやいました。工事の内容や進捗を説明すると『ありがとう』『大変だけど気をつけてね』といった声を掛けていただきました。皆さんからみれば入社年数など関係なく私はプロ。自分の仕事や言葉の重みを感じ、グツと身が引き締まりました」

復興現場で働くことの重みを知った山上。担当を任された際に上司から言われた一言を胸に刻んでいる。

東北で得た「先を読む」力
山上が配属されたのは、津波被害にあった宮城県気仙沼市にある水産加工団地の土地造成工事の現場だった。山を切り崩した土を港周辺の盛土に利用し、地盤をかさ上げすることで浸水を防ぐ工事だ。

「配属されたときは、最初の工程である地盤改良工事が始まったところでした。被災地に本当に自分が立っているということは分かっていたのですが、工具の名前もわからない状態で、これからあの山を切っていくと言われてもスキルが大きすぎて実感が持てませんでした」
初めての現場に戸惑いはあったが、地元の人々からの言葉が山上を奮い立たせた。

「復興現場で働きたい」と想いを伝えました」
約三週間の研修後、山上は宮城県の復興現場に配属となる。三年越しの想いが実った瞬間である。



協力会社に所属する入社2年目の田村さん(左)と。「年齢が近いこともありすぐに仲良しに。2人でよくご飯を食べに行ったりいろんな話をする仲なんです(笑)」(山上)

profile



やまがみ・あきこ●1989(平成元)年、大阪府生まれ。大学院では理工学研究科土木工学を専攻し、2014年4月に(株)大林組入社。就職活動の時期から東日本大震災の復興現場配属を希望し、気仙沼の水産加工団地を2年半担当する。2016年9月より南北線陸上トンネルJV工事事務所に配属され、今に至る。

「気仙沼では、地元の人たちの交流会にプライベートで参加するようになりました。職業、出身、年齢など関係なく、気仙沼にいる人たちが月に一回ほど集まっていたんです。地元企業の社長さんの講演会や板前さんによる寿司の握り方の実演など、気仙沼に根付いたいろいろなお話を聞くことができて楽しかったです!この人たちのためにも仕事をがんばろうと思いました、自分の仕事に誇りを持ちました」

仕事を通して思いがけない場所に赴任し、その場所を楽しめることが現場監督の魅力でもある。

ものづくりへの好奇心から土木の世界へ飛び込んだが、復興現場を経験してその土地の人々の役に立つ喜びや、協力会社とともに一つのものをつくりあげる楽しさが山上の成長に繋がっている。

my Growing 私が建設業界で学んだこと